
キレイなバラには、毒がある～観月の回想～

雪野滴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キレイなバラには、毒がある〜観月の回想〜

【Nコード】

N2788Y

【作者名】

雪野滴

【あらすじ】

前作、「キレイなバラには、毒がある」のおまけストーリー。

間抜けな彼との、勉強会

あの日、私の愛する馬鹿のもとを離れてから、三年の月日が経った。

私、観月里奈は現在、アメリカの大学で英文学を学んでいる。

自分の好きなことを思う存分勉強できるのは、充実した時間だと思う。

だけど…。

「やっぱり、一人は少しつまらないわね…」

大学でのお気に入りの場所、図書館の一番奥の席で勉強しながら、大きく溜め息をつく。

こっちに来て、新しい友達もできた。私の他にも、日本からの留学生はいて、よく一緒に遊んだりもする。

でも…、やっぱり一人の人物のことが頭から離れない。

「今頃、何をしているのかしら、勇馬君………」

そうして私は、なんとなく空を見上げた。

彼と過ごした時間を、思い出しながら。

私が旅立つ一週間前。ある一人の落ちこぼれが、私に泣きついてきた。

「頼むつ、観月！勉強教えてくれ！！」

「……………」

そうして涙を流しながら私に土下座をしているのが……………

「おい、勝手なナレーションを入れるな。俺は泣いてないし土下座もしてない」

「うるさいわね、細かいことを」

そんなツッコミを入れるこの男が、学校一の馬鹿、霧谷勇馬。

便所たわしのようにツンツンした無造作な頭が特徴で、

私の……、彼氏、だ。

「それで？何の教科を教えて欲しいのかしら？」

「えーと、数学と化学と物理と古典と英語と……」

「それじゃ霧谷君、勉強頑張って」

「待つて頼むって！本当に全部ヤバいんだって……！」

なぜ彼はここまで必死になっているのか。

そう、もうすぐ定期テストが始まるからだ。

今回良い点数を取れなければ、赤点は確実らしい。

全くこの馬鹿は本当に……世話がやける。

「場所は？」

「へ？」

「だから、場所はどこにするの？勉強するんでしょ？」

「ほっ、本当か……！」

「ただし、成績上がらなかったら殺……、殺すわよ」

「……今、言い直した意味あったのか？」

そして放課後。

「恋人の家に初めて行くなんて……とっても緊張するわ。いやん」

「嘘つけオイ」

結局、勉強は霧谷君の家ですることになった。

「本当よ？だからさっきから、足取りが不安定なの」

「そうか、その不安定な足取りで、よくもまあ俺の靴のかかたとを正確に踏み抜いてくれるもんだな」

私は彼の一步後ろで、彼の靴のかかたとを踏んで歩行を妨害ながら歩いている。

「あなたの歩調に合わせて歩いているからよ。不可抗力だわ」

「だったら後ろ歩かなきゃいい話だろ!!」

「しょうがないでしょ…。まだ、隣を歩くの、恥ずかしいから…」

「え、そ、そうなのか?えーと…まあ、それなら仕方ないよなっ!」

「あと…あなたの靴、とても踏み心地が良くて…」

「返せっ!!俺のときめきを返せっ!!」

そうやって話している間に、目的地に到着してしまった。
もう少し、踏んでいたかったな…。

「そこ、名残惜しそうにしてないで入って」

でも、玄関先から霧谷君が呼んでいたの、仕方なく中に入った。
すると

「あれ?お兄ちゃん、お客さん連れてきたの?」

そこには私より少し背が低い、ポニーテールの女の子が立っていた。

「ああ、そういえば二人は初対面か。

観月、こいつは俺の妹の楓^{かえて}。

楓、こっちは俺のクラスメイトの観月だ」

「初めまして。霧谷楓です。いつも兄がお世話になってます」

と言ってペコリとお辞儀をした。

「初めまして。へえ、こんなかわいい妹さんがいたのね」

霧谷君の妹…か。

一体どんな面白い見せ物になるのだろうと半ば期待していると、

「あ、スリッパどうぞっ」

と言って、履き物を用意してくれた。

「お兄ちゃん、後でお茶とお菓子持っていこうか？」

と、兄に対しても気配りを見せる。

「いや平気、俺が自分で運ぶから」

「そっか。」

「じゃあ私はリビングの方にいますので、何か御用がありましたら呼んでください」

そして私達に気を遣ってか、奥の方に引っ込んでいった。

……信じられない。……なんて、……なんて、

「なんて、まともなの……!?!?」

「なんかリアクションおかしいだろうがああ!!」

あれが本当に霧谷君の妹だというの？
だとすると……

）「結論」

隠し子ね、間違いないわ。

「…霧谷君、たとえ何があつたとしても、妹さんはあなたの誇りよ…！」

「うん、何考えてるかわからんけど多分違うから安心しろ」

そんな雑談を済ませて、霧谷君に案内され二階の部屋に上がる。

「あら、案外すつきりしてる部屋ね…。つまらないわ、もっと混沌が欲しいところね」

「おーい、お前は何を期待していたんだ？」

霧谷君の部屋は青を基調としているかなり片付いた空間で、私が持っていた男の人の部屋のイメージとはかけ離れていた。

「じゃあ俺はお茶入れてくるわ」

「ありがとう」

ここで霧谷君が退場。

さて、と……。

2分後。

「お茶入ったぞー」

「ありがとう、いただくわ。…ところで霧谷君」

「ん？どうした？」

「私達、今この部屋に二人きりよね？」

「ゲホッ、ゲホッ！！な、何をいきなり…」

いじりがいのある初々しい反応。

「このままだと私……そのうち、こんなことされてしまうのかしら……」

そう言っつて、私はさっきの間に見つけ出した、水着姿の女性が多数写っている本を見せつけて

「うおおおおー！？ななななんつつもの取り出してんだお前はああー！」

彼はバッタのようなジャンプで本を奪い返した。

「あなたのベッドの下の運動靴が入った段ボールに仕込まれた二重底の下に新聞紙を重ねて隠してあったから…つい見つけちゃったの」

「つい見つけられるレベルじゃねえだろ絶対！！」

「こんなものの隠し場所に頭使うくらいなら、普段から少しは勉強しなさいよ」

全く…男子ってどうしてこんなものに興味があるのかしら…。

「…私というものがありません」

「ん？何か言ったか？」

「っ…別に、何でもない…！」

小声で言ったんだから、そこは聞き流しなさいよ…！この馬鹿…！

「それより、勉強するんでしょ！？ほら、早く準備する！！」

「りょ、了解……」

そうして、ようやく勉強は始まった。

苦手なものって、みんなある

「じゃあ、次の文章を英訳して。「窓を開けても構いませんか?」」

ちなみに解答例：{ Do you mind me open in
g the window? }

・霧谷君の解答：「 Window / Are You OK? 」
訳：（お前は大丈夫か?窓よ…）

「霧谷君、私、急用を思い出したからこれで…」

「待つて!真面目にやってる!マジで真面目にやってるから!」

立ち上がってその場を去ろうとする私の足にすがりつく霧谷君。
…彼は本当に義務教育の過程を終えたのかしら?

「頼む!お前しか頼れるやつがいな…って、うおっ!」

彼が目線を上げた瞬間、何故か突然私から目をそらした。

……ああ、なるほど。

たしかにその角度からなら……。

「見えたのね？スカートの中……」

「め、滅相もない……」

「嘘ね」

「嘘じゃねえ！」

「見たでしょ」

「見てねえ……」

「白の」

「ウサギ柄……はっ、しまっ……！……」

どうやら彼はつくづく嘘をつけない性格らしい。

「じゃあその記憶も真っ白に消し飛ばしてしまいましたしょうか……」

「いや、観月さん…？マジで目が怖いんだけどげふうっ…！」

とりあえず制裁として彼の顔を蹴り飛ばす。何かゴキツといい音がしたけど、気にしないでおく。

「あら霧谷君、鼻血が出てるわよ？…そんなに興奮したの？」

「たった今のお前の行動を思い返してみろっ…！」

「まあいいわ。鼻血が止まるまで休憩にしましょう」

「くそっ…、悪気はないのに…！」

しばらくすると、鼻にティッシュを詰めた霧谷君が話しかけてきた。

「なあ、そういえば俺、観月のアドレス知らないよな？」

「え…？」

「いや、離れても連絡とれるように、メールアドレスくらい知って

おいの方がいいよなーって」

なるほど。たしかに、これから離ればなれになるのだから、メールでやりとりしたいのも当然だと思う。

だけど…、

「……ないわ」

「は？」

「……私、携帯持ってないから」

「そ、そうなのか？じゃあ、パソコンでも…」

「……私、パソコンも使えないから」

……沈黙。二人ともしばらく固まった。

そして霧谷君が私を指さし、

「……っなんで今のご時世、携帯やパソコンの一つも使えないんだよ！ありえねえだろ！！！」

「仕方ないでしょ！あんなボタン一つで全てが決まってしまう代物なんて、危なっかしくて使えるわけないじゃない！！」

パソコンなんて電源つけるだけで精一杯よ！！

全く、どうして人類というのは何でもかんでも機械に依存してしまうのかしら

「もしかしくなくても、観月って機械音痴なのか…?」

うっ、人が気にしていることをストレートに言うなんて……

「そ、そんなことないわよ！絶対！！」

「じゃあ、どんな電化製品なら使えるんだよ？」

「……ま、魔法瓶とか」

「それは断じて電化製品とは言わん！！」

「あー、もう、うるさいうるさい！！勉強再開するわよ！！」

自分に不利な話題は強制終了。今は勉強の方が大事なんだからっ！！

そして三時間ほどが経過。

「あら、もうこんな時間…。今日はここまでね」

「本当だ。あー、久しぶりに勉強して疲れたー…」

「続きは明日にしましょう」

「う…、明日もか…」

「あなたが頼んできたことですよ？嫌なら教えてあげないわよ」

「ごめんなさいお願いします」

まあ、頼まれなくても教えるけど…。
だって、その方が…長い時間、一緒に居られるから…。

「どうした観月？急にポーツとして」

「な、何でもないわよ…この変態」

「なっ…！だから、スカートの方は悪気はなかったって言うてる！」

「……あのいかがわしい本については？」

「そ、それは…」

「変態っ」

まるでおしどり夫婦のように仲良く会話をしながら玄関まで来ると、妹さんが見送りに来てくれた。

「あっ、よかったらまたいらして下さい。その時は、ちゃんとおもてなしするのでっ」

「ええ、ぜひそうさせてもらっわ」

本当によくできた妹さんだな、と感心していると、

「あーあ、私もこんなしつかりしたお姉ちゃん欲しかったなー」

ふふっ、嬉しいことを言ってくれるわね。私もこんな素直な妹なら

大歓迎……

「楓、安心しろ！そのうちこいつはお義姉さんになってるからな！」

「なっ……！！！」

この人はどうしてこんな恥ずかしいことを臆面もなく言えるの……！？

「え？どういふこと？」

「つまりだな、そのうち俺がこいつを……」

グシヤッ！！

「ついい痛たたたあ……！観月、足踏んでるって……！」

これ以上余計なことを言わないように、彼の足を踏み抜いて黙らせる。

本当にこの馬鹿は……！！

「それじゃ、お邪魔しました」

「あ、はいっ！ほらお兄ちゃん、送ってあげなよ……！」

「そうしたいのはやまやまだが、足が…。み、観月、待って!!」
「うるさい、馬鹿!!」

片足を引きずりながら霧谷君が追いついてきたので、仕方なく歩くペースを合わせてあげることにした。

次に余計なことを口走ったら、必ず仕留める。

そう、心に誓って。

いつでもあなたは、傍にいる

「そういえば、俺と観月の家って意外に近かったんだな」

私を家まで送ってくれている最中の、霧谷君が問いかけてくる。

「そうね。ちょうど学区がこの辺りで区切られるから、小中学校は一緒にならなかったけど」

「じゃあ、高校で俺らが出会ったのって、けっこう運命的かもな」

はあ…。

彼のくさい台詞に、何故か自然と溜め息が出てしまう。

「霧谷君って、馬鹿のくせに無駄にロマンチストよね。馬鹿のくせに無駄に」

「馬鹿とか無駄とか連呼するな！！泣きそうになるわ！！」

そつだ。試しに質問してみよう。

「ねえ、霧谷君は何歳までサンタクロースを信じてた？」

「何言ってるんだ？サンタは実在するだろ？」

「……うわぁ……」

「そんな哀れみの目で俺を見るなっ！！」

「ふふっ」

……こうしてふざけ合っていると、本当に楽しく思える。

時間が経つのを忘れるくらい楽しくなってしまう。

もうすぐ、会えなくなるのに

そんな言葉が、ふと頭の中に浮かんで、私は急に怖くなった。

「観月、どうした？」

突然黙って立ち止まった私に、霧谷君が声をかける。

そんな彼の顔を見ると、自然と涙が溢れそうになった。

「……霧谷君、私、どうすればいい？」

気付けば、そんな弱音を口にしていた。

「霧谷君と……二人で一緒に居られる時間が、すごく、幸せでも、幸せって思うほど、離れるのが辛くなって……」

そして私は、ついにその言葉を言ってしまった。

「思い出なんて……ない方が良かったのかしら……」

それは、私が絶対に言わないようにしていた、最低の言葉だった。

私のために、自分の全てを懸けて愛情を捧げてくれた。そんな彼の思いを、全否定するような言葉だった。

それでも私は、それを口に出さなければ、自分を保っていられたかった。

ふと我に帰り、霧谷君を見る。

彼は、私の最低な言葉を聞いても、真剣な眼差しで私を見つめていた。

そして、彼が、口を開いた

「…思い出は重いでー、って感じか？」

……。

ボコオツー！

「ぐはぁっー！」

……私はかつて、ここまで本気で人を殴ったことがあっただろうか。

「そ、そんな怒るなよ…冗談だつて」

「どうしてこのタイミングで冗談が言えるのー！！」

本当に、どこまで馬鹿なの！？人が真剣に悩んでるといつのに

「そんな真剣に悩まなくても、大丈夫だよ」

「……え？」

もう一度、霧谷君の目を見る。

その目は何一つ曇りがなくて、それでいて、すごく優しい目だった。

「会えない時間が長い分だけ、また会えた時の嬉しさも倍になるしな」

「……でも、私」

「それでも、今が不安になるときは、これから先のことを考えればいい。

先が見えなくて不安になったら、今までのことを振り返ればいい。

そうすれば、どこかで俺たちは、二人で笑っていられるからさ」

そう言っつて、彼は明るく微笑んだ。

「……そうか。今やっとわかった。

どうして私が、こんな馬鹿を好きになったのか。

「ま、まあ……俺はいつでも、お前のこと、好きだけどな……」

いつも馬鹿で不器用だけど、

いつも真っ直ぐで、私の心をそっと和らげてくれる。

そんな彼の優しさに、私はどうしようもないくらい……救われているんだ。

「プツ…アハハハハハ！」

何故か笑いが込み上げてきた。そういえば最近、心の底から笑えてなかった気がする。

「な、何がおかしいんだよ！！」

顔を赤くして怒る最愛の人に、私はギュッと思いきり抱きついて、囁く。

「……ありがとう」

この先何があっても、私はこの温もりを忘れることはないだろう。私の世界は、こんなにも大きな愛で、満たされているのだから。

「……ねえ、そういえばまだ私から言っただけじゃなかったわね」

「ん？」

「私も、霧谷君のこと……大好きよ」

そして、二人は唇を重ねた。

二人を見下ろす夜の月は明るく、微笑んでいるようだった。

「クスツ、懐かしいわね……」

そして現在。

私は勉強を終え、昼食を摂るために図書館からテラスに移動した。

今では、彼とはエメールで文通をしている。

機械が苦手な私への配慮として、彼が言い出したことだ。

でも……最近になって、返事がなかなか来なくなった。

「何かあったのかしら…」

私を心配させるなんて、帰ったら覚えてなさい…

と握りこぶしを固めていると、何だかやけに外が騒がしいことに気がついた。

見れば、そこにはいつの間にか人だかりができていた。

野次馬で様子を見に来ていた留学生仲間を発見したので、尋ねてみる。

「ねえ、何かあったの？」

「ああ、観月。何でも敷地内に不審者が入ったらしいよ。」

「へえ……面白そうね」

友達の話に関心を示すようにしながら、内心は、大して面白くないわね…と思っていた。

「それでね、その不審者つてのが日本人だったんだけど、結構イケ

メンだったの！！私さっき見てきちゃった！！」

何を一人で舞い上がっているのか…と呆れているのを隠しながらも、一応話を聞く。

「黒髪でツンツン頭の男の人だったんだけど、ちょっとだけ頭悪そうだったな。」

捕まった瞬間、警備員に何度も自己紹介してたくらいだもん！」

「……え？」

その言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが弾けた。

「ねえ！！その人、何て名前だった!？」

「え？えと、たしか、

きり何とかって………」

その話を最後まで話を聞くことなく、私は走り出していた。

まさか

そんなはずはないって、

期待しちや駄目だつて、

いくら自分に言い聞かせても、

鼓動と共に速くなる足を、止めることができない。

待ちきれなかつたら、会いに行く。約束だ

そんな別れ際の言葉が、頭の中に鮮明に思い浮かんでいた。

そして私は、警備員に捕まっている、一人の男を見つけた。

「ちよっ！マジ本当に、

Please release me！（離してください！）

……何故か日本語混じりだし、発音はめっちゃくちゃだった。
でも、一応それなりの英語を話していた。

「だーから、
Please let me meet her!（彼女に会わせ
てください!）
ちよ、無視すんなって頼むから!」

日本語すら満足にできなかった、どうしようもない馬鹿が、一体ど
れだけ勉強したんだろうか。

「くそー!! 観月ー!! どこだー!!」

ただ……私に会うためだけに。

今でも胸に輝く銀色の薔薇を握りしめ、私は再び最愛の人のもとへ
走り出した。

そして、ずっと声に出して叫びたかった、愛しい名前を呼ぶ。

「勇馬君っ!!」

向こうもこちらに気づき、咲き誇るような満面の笑みで返してくれた。

「おお、里奈！！久しぶり！！元気だったか？」

困惑気味の警備員に、

「知り合いなんです」と説明し、ようやく解放された彼に、涙をこらえて悪態をつく。

33

「……馬鹿っ！！会いに来るなら、連絡ぐらいしなさいよ……！！」

「ハハハッ、ごめんな」

そして、悪びれた様子もない彼に抱きつき、抑えきれない気持ちを囁く。

「約束……。覚えててくれたの？」

「当たり前だろ。忘れるわけないって」

「……………勇馬君」

「ん？」

「ありがとう……………私、本当に幸せよ……………」

「……………ああ、俺もだ」

もう私は、一人で不安になることはない。

だって、たとえ私がどんな所にいたとしても、
あなたはこうして会いに来てくれるから。

あなたが私に、世界で一番の幸せをくれるから。

きつと……………つひつゝ、

今なら、胸を張って言える。

私は……、

私は、あなたを好きになって、本当によかった……！！

いつでもあなたは、傍にいる（後書き）

これまでこの作品を読んでくださった皆様、本当にありがとうございました！

これで、

「キレイなバラには、毒がある」シリーズは完結となります。

次回作は未定ですが、これからも投稿を続けていきたいと思えます。

これからも、どうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2788y/>

キレイなバラには、毒がある～観月の回想～

2011年11月21日23時48分発行